中学校の鑑賞教育を考える

2．和楽器や自然音・環境音の指導に役立つ映像ソフト

尚美学園大学教授　石澤　眞紀夫

新学習指導要領の、「指導計画の作成と内容の取り扱い」のところで、器楽指導として「和楽器」を用いることとあり、また、「A表現およびB鑑賞の指導にあたっては、適宜、自然音や環境音などについても取り扱う」ように記されている。しかし、現場では情報が不足であり、指導の参考になるような手がかりが容易に入手できないという問題点を抱えている。

今回は、上記の二つの内容にかかわる映像ソフトを紹介し、指導の工夫の参考にしていただけたらと思う。

企画・制作　東京シネ・ビデオ株式会社『和楽器に挑戦』優秀映像教材選奨最優秀作品　文部大臣賞受賞作品。対象　中学校1～3年　21分。

おおまかな内容は「初めて和楽器を体験する生徒たちが、身近な地域の祭り囃子を通して太鼓・笛・鉦などの和楽器に取り組む様子」を描いている。

具体的な展開を場面ごとに追っていくことにしよう。導入は、北海道・苫小牧の中学校での2人の生徒（兄弟）による津軽三味線の演奏場面である。次に、三味線を始めたきっかけを「3年前に師匠の迫力ある演奏を聴いて感激し、カッコイイと思ってやり始めた」と兄が語る。そして、外国で演奏を披露するまでに上達したことが紹介され、和楽器には三味線だけでなく、他にも魅力的な楽器が数多くあり、彼のように自分が楽しそうだなと感じる楽器を探して挑戦してみませんかと誘う。そしてタイトル。

ここからがメインの場面である。千葉県佐倉市の秋祭りの実況。20台もの山車（だし）が出て江戸時代から続く祭り囃子が演奏される。佐倉の人々は古くから自分たちの身近なものとして祭り囃子に親しんできたという。市の井野中学校では3年前から、この祭り囃子を取り上げて和楽器の授業を始めていると述べ、授業の実際を見せる。

まず、本時の「授業の目標」が“みんなの住んでいる町の音楽文化に親しんでみよう”であることを確認させ、地元の佐倉囃子保存会の人々の協力によるお囃子の演奏『仁羽』（同じリズムが繰り返されるので、初めて習う生徒に解りやすい曲）を聴かせる。使用楽器は、大太鼓、締太鼓、鉦、篠笛、大拍子。指導者の小長井先生も鉦を叩き演奏に参加。踊りも加わる。佐倉の囃子の特徴は「ツケ」という締太鼓で間（ま）を取ることが大切であると、最初に基本になるこのリズムと表現の特徴を、お囃子を聴きながら感じ取らせる。

つぎのステップは実習で、リズムの把握が「口唱歌」（くちしょうが）であることを知らせ、「テケ・天・ツク・テ・テ・ツク・天・ツク・ツ」と唱歌させてから、締太鼓で打つ。そして、右手、左手の奏法を知らせ、生徒に両手で膝を叩かせる。さらに、撥を用い古タイヤを利用して、4人1組となって練習させ、リズムの把握を徹底させる。保存会の方々もグループの中に入り、手を添えて教えている。

生徒たちのリズムもそろったところで保存会の方々の演奏も加わる。生き生きとした音楽の表現に変化する様子から、指導者の授業構成の巧みさが確認される。

次は、**歌舞伎音楽における太鼓の表現**内容の変化・発展として、歌舞伎の黒御簾

（みす。下座音楽）での、打楽器の表現の紹介である。「水音」「雨音」「波音」「雪音」が、それぞれの情景場面の映像と共に提示され、大変分かりやすく効果的である。さらに、滋賀県甲賀郡土山町（昔は鈴鹿峠の宿場町だった）は、鈴鹿馬子歌が有名。ここの土山中学校は、郷土の民謡を通して和楽器を学ぶ授業が行なわれている。民謡歌手に来校を願い、民謡を歌い、歌唱指導をして頂き、各種の和楽器の演奏、さらに生徒に楽器に触れさせ興味・関心を高めている。その演奏のレベルは大変高く、質のよい音楽と指導の大切さを再認識させてくれる。その上、日本音楽集団の演奏会の有様も紹介される。

まとめのコーナーは、佐倉に戻り、前に学んだ郷土のお囃子のリズムを踏まえながら自分たちのお囃子を工夫し、創作をする活動と、その結果を地域のお祭りの場で演奏紹介するという場面で終わる。生徒の活動が校内だけで済まされるのではなく、地域へとつながり、広がりが期待され、生涯学習につながる授業の展開が示されており、さらに、費用が少なくて済みそうなタイヤの活用など、和楽器導入の参考・ヒントになる映像作品であると考える。

中学校音楽科 新学習指導要領準拠『自然の音から音楽の音へ』（学研ビデオ）

スペースがなくなってきたので、制作の意図を挙げておこう。

「人間は、古くから自然の音とかかわり合い、そこから自分たちの感性にあった音をすくい上げ、また、新たな音を創造し、音楽という文化を育んできた。この映像では、自然の音、人工的な音などと各民族とのかかわり方の違い、各民族の楽器の特徴などを探り、その中から描く民族の音の感受の特色や、音楽表現などの独自性を考え、これからの音楽教育に役立てようとする」とあり、内容は大変情報量が多い。

まず、断片的に、中近東の市場の風景から始まり、世界各国の人々の生活が映し出され、民族に培われてきた独自の感性が自然の音を受けとめ、その中から個性豊かな音楽の音を生み出していったと語る。柱立ては以下の通り。

「**自然の音に対する民族の感受の仕方の相違の紹介**」―日本の風景～せせらぎ、鳥のさえずりから南洋での漁の有様、密林での狩猟。「**暮らしの中で生まれた音と感受の仕方**」―中国の市場、ドイツの市場、日本の酉の市での言葉や発声の相違、物売りや火の用心の声の抑揚、イスラムの祈り、きこりや水車の音、機を織る音など。そして西洋の庭園と噴水、日本の庭園と滝、ししおどし。「**音を発する遊具―各民族の楽器**」―草笛から石笛、ガラガラ、法螺貝、割れ目太鼓、タブラ・バヤ、鼓など。西洋の鐘と日本の鐘の表現の相違とそれを科学的に分析。各種の笛や弦楽器の紹介。「**三味線のサワリ**」―サワリの効果。「**エピローグ・言葉と発声**」―規則的な振動の音と不規則な振動の音との表現の味の相違として、シタールやケチャ、イタリア・オペラのベルカント、能楽の声、それぞれの独特の味わいを理解することの大切さと、より奥深い音楽の広がりを求めることができることを述べて、まとめとしている。

以上のように、盛り沢山な内容なので、指導者は、視聴するポイント―「何と何を」子どもにとらえさせたいか―を焦点化しておく必要がある。または、特に印象的な部分を抽出させ「どの部分の、どんなことが印象的か」をメモさせて発表させるなどの工夫が必要ではないかと思う。